

## 『金鶏神社の啓示』～邂逅（かいこう）の杜から「科学のための東洋哲学」の発想へ～

吉田善一

2026年4月9日

### 第一章：震える手で刻んだ「宇宙の理」

2009年11月2日、月曜日。埼玉県比企郡、国立女性教育会館（NWEC）を包む空気は、秋の深まりとともに凜と張り詰めていた。

東洋大学吉田研究室のゼミ合宿二日目。集合時間の12時30分までは、まだ一時間以上の猶予がある。52歳になった私は、ひとり、武蔵嵐山の柔らかな光に包まれた散歩コースを歩いていた。

木々の間から差し込む陽光が、私の思考を浄化していく。その時、ふと見上げた空から、一筋の閃光が脳裏を貫いた。

「天地自然の理（ことわり）に従う――。それは、あるがままに認めるということだ」

これまで研究してきた陽明学の真髓が、専門である「技術」という言葉と、鮮やかに溶け合った瞬間だった。

「技術者とは、万物をあるべき所にあるようにする存在なのだ」

私は立ち止まった。自然の理のすべてを知ることは、人間には叶わない。しかし、自らの「心」に照らし合わせ、私利私欲を排することはできる。これこそが「心即理」。自覚的に宇宙の方向と一つになり、万物一体の仁を体現すること。

「だからこそ、技術者は自分を鍛え続けなければならない」

この気づきは、単なる着想ではなかった。長年の問いに対する、天からの回答であった。私は衝動に突き動かされるように、宿泊棟の自室へと走り帰った。手帳を開き、震える手で言葉を刻みつける。

「理」を正す。私欲をなくし、大きな徳を持つ。宇宙と一つになり、天理に従う――。

一気に書きなぐり、ふと呼吸を整えた時、私はある事実に気づき、戦慄した。

先ほどまで私が立ち尽くし、天の啓示を受けた場所。そこは壁一枚を隔てたすぐ向こう側に、王陽明を祀る「金鶏神社」が鎮座する場所だったのである。

### 第二章：乱世の覚悟と天命

書き終えた手帳を閉じ、私は窓の外に広がる空を見つめた。

天とは、この宇宙をあまねく支配するもの。そこには人間の善行も、人知れぬ悪徳も、すべてが剥き出しのまま映し出されている。私たちの頭上には、逃れようのない巨大な意志が横たわっているのだ。

ふと、風が頬を撫でた気がした。静寂のなか、遠い時代を生きた王陽明の、厳格ながらも温かな眼差しが私を射抜く。

「お前、良いことをやっているな」。

幻聴だろうか。いや、それは確かに私の内側から響き渡った、彼からの語りかけであった。その確信が、震えるほどの重みを持って身体に染み渡っていく。

今、私の胸に宿ったこの確信——これこそが「知命」なのだろう。

天から授かった使命を感じる仕事に、自分が入ることができたという静かな充足感。科学と陽明学を繋ぎ、次世代へと受け継ぐ。その大きな歯車に、私の命が噛み合ったのだ。

しかし、天理に従えばすべてが平坦な道になるわけではない。

「善いことをすれば、すべてが上手くいく」などという甘い幻想は捨てなければならない。むしろ、正しい道を行こうとすればするほど、逆風は強く吹き荒れる。それがこの世の理だ。

乱世を生き抜く覚悟とは、たとえ執拗な邪魔が入ろうとも、無慈悲な失敗に見舞われようとも、己が「善し」と信じたことをただ愚直にやり続けること。報いを求めず、ただ天を仰ぎ、今この瞬間に全霊を注ぐ。

がむしゃらに駆け抜けたその果てに、ふと足を止めて振り返る。その時、荒野に刻まれた一本の足跡。それこそが「天道」であり、私がこの世に生を受けた証——「天命」そのものとなる。

### 第三章：自分を創る場所

私がこの「天命」に辿り着けたのは、決して最初から特別な才能があったからではない。

世の中では「やりたいこと」や「好きなこと」を見つけろと急き立てられる。だが、それよりも大切なのは、自分に「向いているかもしれないこと」の種を見つけることだ。その微かな可能性を、実際に手で触れ、泥にまみれて試せる場所。それこそが大学という舞台なのだ。

振り返れば、私の歩みもまた、その試行錯誤の連続だった。15歳で機械工学の門を叩き、20歳で物理学の深淵を覗き、27歳で電気工学の世界へと身を投じた。そして37歳、長年勤めた電気メーカーの技術者としてのキャリアに見切りをつけ、私は大学教員へと転身した。

「自信があったから、そんな大胆な転換ができたのですか？」と問われることがある。答えは否だ。最初から自信など持ち合わせてはいない。ただ、自分で決めて、自分の足で

一歩を踏み出した。その「行動」の積み重ねだけが、後から私に「自信」という名の盾を授けてくれたのだ。

決断し、動く。その繰り返しが己を練り上げ、やがて天の理と響き合う。

「『向いているかもしれない』という直感を信じ、自ら決めて動きなさい。そのとき、君たちの前にも道が開けるはずだ」――。

教壇に立つ身として、私はいつもそんな言葉を学生たちに贈るよう心掛けていた。彼らが恐れずに自らの可能性を試し、自らの足で歩み出すきっかけになればと願いながら。

#### 第四章：一期一会の志

あの日、私の運命の歯車は静かに、しかし決定的に回り始めた。

中学校を卒業後、私は工業高専の機械科へと進んだ。文字通り、朝から晩まで油にまみれ、硬質な機械と格闘する日々。しかし、実習服に染み付いた油の匂いととともに、私の心には小さな隙間風が吹き始めていた。

「このまま、ただの技術者として終わるのだろうか」と。

そんな17歳の冬、一人の男が私たちの前に現れた。国際政治学の泰斗、京都大学教授・高坂正堯。教壇に立った彼は、多感な2年生たちを鋭い眼光で見回すと、朗々たる声でこう言い放った。

「諸君、理系科目だけで満足してはいけません。国際情勢を、文化を、そして哲学を学びなさい。君たちに必要なのは、小手先の技術ではなく『教養』だ！」

その言葉は、凍てついた私の魂に火を灯した。高専を出て中堅技術者の道を歩むことに疑問を抱いていた私にとって、それは天からの啓示に等しかった。まさに『論語』にいう、

「われ十有七にして学に志す」――。

私の学問への渴望は、この瞬間に産声を上げたのだ。

わずか一時間。高坂先生が演壇に立ち、言葉の礫（つぶて）を叩きつけて去っていくまでの時間は、それだけだった。講演を終えた先生は、風のように去っていき、その後二度とお目にかかることはなかった。しかし、その濃密な一時間は、私の人生という長い航路を決定づける「羅針盤」となった。

たった一人の人間が放つ言葉が、少年の魂を根底から揺さぶり、数十年後の生き方までも規定する。これこそが、人と人、知と知が切り結ぶ瞬間の恐ろしさであり、妙味でもある。あの日、油にまみれた実習服のまま、食い入るように先生を見つめていた十七歳の私。彼が感じたあの衝撃こそが、今の私を大学の教壇へと押し上げた原動力に他ならない。

高坂先生は、こんな痛快な言葉も遺されている。

「古典を読んで分からなければ、自分をアホだと思いなさい。だが、新刊を読んで分からなければ、著者をアホだと思えばいい」

至言である。古の知恵が詰まった『論語』を「難しい」と投げ出すのは、己の練磨が足りない証左に過ぎない。分かるまで読み、分かるまで実践する。一期一会が生んだその志を胸に、泥臭い積み重ねを続けていくこと。それこそが「教養」への唯一の道なのだ。

## 第五章：三十有七、独り立つを期す

高坂先生の教えを胸に、私は迷わず舵を切った。教養教育の府へと入り直し、そこで運命的に出会ったのが、物質の極微を解き明かす「現代物理」と、人の道の根源を問う「儒教（陽明学）」という、知の両極にある深淵だった。

大学卒業後、私は松下電器（現パナソニック）の生産技術研究所へと身を投じる。そこで待ち構えていたのは、創業者・松下幸之助の哲学という名の洗礼だった。

正直に言えば、当時の私はこの「幸之助哲学」にさほど強い関心を抱いてはいなかった。陽明学という深遠な精神世界には若き日から惹かれていたものの、会社で説かれる経営哲学は、どこか現場の技術とは切り離された実務的なものに思えたのだ。ところが、課長という管理職に就いた途端、組織は私をさらなる学びの場へと導いた。「人の上に立つ者、まずこの思想を再修得せよ」という、リーダーとしての資質を問う厳かな要請である。

「現場の仕事だけで手一杯なのだが……」と、当時はある種の義務感から、いわば「形」として学んでいた。しかし、この時半ば強制的に心に刻まれた哲学が、場所を変えた将来、陽明学と溶け合って私を支えることになるうとは、当時の私には想像もつかないことだった。

時代は基礎研究ブームの真っ只中。私は京阪奈学園都市における「先端技術研究所」の立ち上げに携わり、「次世代加工グループ」の責任者として、現場で先端技術をリードした。技術の刃を研ぎつつ、一方で幸之助の「物を作る前に、人を作る」という至言を、日々の人材育成の現場で少しずつ実践し始めていた。

しかし、37歳。私は安定した大企業の看板を捨て、山梨大学という新たな戦場へ転職を決意する。

その直後のことだ。カナダでの学会ついでに、かつて共同研究で親密だったスタンフォード大学の教授を訪ねようとした。だが、返ってきたのは冷ややかな拒絶だった。

「忙しくて会えない」

松下時代、空港にはリムジンが迎えに来て、大学のゲストハウスが用意されていた。それが今回は「企業の人と同じ時間なら会ってやる。車も宿も自分で探せ」という。

頭を殴られたような衝撃だった。あの大歓迎は、私という個人に向けられたものではなく「松下の吉田」という肩書きに向けられたものだったのだ。自分は優秀な研究者だと思いついてきた。看板を失った瞬間の、この無力感。

(過去の実績など、もはや塵に等しい。ここから、一人の研究者として這い上がってみせる)

私は腹を括った。『論語』風に言えば、

「三十有七にして立つ？」――。

真の自立を誓った再出発の瞬間だった。

山梨大学での日々は、まさに修羅の如きだった。数学と基礎工学を教えながら、寝る間も惜しんでマイクロ加工の研究に没頭する。助教授という身分ながら、松下での改革経験を買われ、大学院改組のリーダーという重責にも奔走した。

だが、理想と現実は甘くない。本当の意味で研究者として「立てた」と確信できるまでには、そこからさらに十五年の歳月を要することになる。

## 第六章：四十、五十、六十にして区切らず

マイクロ加工の研究が実を結び、四十二歳。私は哲学の殿堂、東洋大学に教授として迎え入れられた。

そこは実に数奇な場所だった。物理学を講じる傍ら、私は井上円了の哲学や陽明学を語り、さらには倫理学の教壇にも立つことになったのだ。かつて松下電器の課長時代、ある種の義務感で「いやいや」頭に詰め込まれた幸之助哲学が、ここで予期せぬ輝きを放ち始める。

学祖・井上円了が遺した思想を紐解いたとき、私は戦慄した。円了の説く真理の根底には、幸之助が説いた「人間大事」の精神と驚くほどの共通点があったのだ。その最たるものが「天命を自覚する」という一事である。かつて強制的に学ばされた「形」だけの知識が、陽明学という魂の炎と触れ合い、この地でついに真の教養へと昇華された。過去の無駄と思えた時間さえも、すべては伏線だったのだ。

世にいう『論語』の「四十にして惑わず」を、私はそのまま受け取ることはしなかった。東洋学者・白川静先生の説によれば、「不惑」の核心にある「或」は、都市を囲む城壁を「戈（ほこ）」で守る形、すなわち「國」を意味するという。つまり「不惑」とは、迷わないことではなく「区切らない（不区）」ことなのだ。

自分の守るべき領域を、城壁で囲ってしまわない。専門分野という檻に閉じこもらない。

私はその言葉通り、四十、五十、そして六十代と重ねるごとに、自らの専門を、魂の領土を、際限なく広げていった。

「四十、五十、六十にして区切らず」――。

他人や自分に勝手な枠をはめてはならない。その境界線を消し去った先にこそ、真の自由がある。

しかし、この果てしない拡張の旅において、決定的な「北極星」が見つかった瞬間があった。それは五十二歳のときだ。

「天命を知る」というよりは、もっと直截的な、魂を揺さぶる震動。それは「天の声」を聞いたというべき体験だった。遅まきながら、これこそが私の「而立（じりつ）」の瞬間でもあったのだ。

「五十有二にして天声を聞く」――。

その衝撃が、私を再び、あの深い思索の入り口へと連れ戻す。

物語はここから、再び第一章へと回帰していく。

静寂のなか、書き終えた手帳を閉じ、私は窓の外に広がる空を見つめた。

天とは、この宇宙をあまねく支配するもの。そこには人間の善行も、人知れぬ悪徳も、すべてが剥き出しのまま映し出されている。私たちの頭上には、逃れようのない巨大な意志が横たわっているのだ。

ふと、風が頬を撫でた気がした。静寂のなか、王陽明の、厳格ながらも温かな眼差しが私を射抜く。

「お前、良いことをやっているな」。

今、私の胸に宿ったこの確信――これこそが「知命」なのだろう。

## 第七章：天の声、志の迷宮

物理学の法則が歪み、哲学の言葉が質量を持つ。そんな不思議な思考の迷宮を彷徨う旅人のような心地で、私はペンを置いた。

ふと気がつく、私は時間の継ぎ目が溶け去った奇妙な空間に立っていた。そこでは十七歳の少年が機械と格闘し、三十七歳の技術者が看板を失って立ち尽くし、五十二歳の私が天の声に震えている。すべてが同時に存在し、メビウスの輪のように表裏一体となって繋がっている世界だ。

残念ながら、私の旅はまだ終わらない。他人の言葉を素直に受け入れる「耳順（じじゅん）」の境地も、心のままに動いても道を外れない「従心（じゅうしん）」の域も、いまだ遙か彼方の霧の中にある。

だが、この広大な知の迷宮を歩むための「地図」を、私はすでに学祖・井上円了先生から授かっている。

「活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり」

天理、天意、天命。この三つの光こそが、現代という荒波を突破するための唯一の灯火だ。

今、私たちは、昨日までの正解が明日には通用しない、激動の真っ只中にいる。人工知能（AI）が瞬時に答えを導き出し、人間独自の価値が問われる時代だ。しかし、膨大なデータを計算できる AI でさえ、自らの意志で「志」を立て、不確実な未来に賭けることはできない。予測不能な時代だからこそ、人は「天命を知る」という、揺るぎない覚悟を胸に刻む必要があるのだ。

損得ではない。「良い」と信じることを、まずは愚直にやり抜く。すると、あの不思議な残響が魂の奥底で鳴り響く。

「お前、良いことをやっているな……」

それは決して甘い福音ではない。天は声こそかけてくれるが、手は貸してくれない。むしろ、正しい道を行こうとするほど、逆風という名の「邪魔」を仕掛けてくることさえある。良いことと、助けがあることは別物なのだ。

それでも、報われずとも、逆風に晒されても、なお「良いこと」をやり続ける。その執念こそが、天の意志と響き合う私の命の証。AI には真似できない、魂の震動。それこそが「天命」の正体なのだから。

私は再び、書き終えたはずの手帳を開く。

物語は終わらない。この「不思議の環」を回るたび、私はまた、あの窓の外に広がる空を見上げる。

「お前、良いことをやっているな」と、王陽明が語りかけてくるあの場所へ。

そこから長年かかったが、魂の震動を言葉に刻み続ける日々は、一冊の書物へと結実した。邂逅の杜から始まった思索は、現代の知性と古の叡智を結ぶ、『科学のための東洋哲学』という新たな発想へと至ったのである。

2026年3月、この物語は出版という名の次なる門を開く。